『大般若波羅蜜多経（初会）』
常啼菩薩求法譚冒頭部分の検証

佐　伯　慈　海

『大般若波羅蜜多経（初会）』（以下『初会』）の常啼菩薩求法譚冒頭の内容は，本来前品の末にあったものが誤って挿入されたと考えられている。この内容について十万頌般若諸本（デルゲ版，北京版，チョネ版，ストク版，ナルタン版，シェルカル（ロンドン）写本，プダク写本，『初会』）を比較検証した結果，この内容は常啼菩薩求法譚が一時期十万頌般若を離れて別行に流布していた時代の痕跡である可能性を指摘した。また十万頌般若に二つの系統が見られる点と，その先後関係にも言及した。

常啼菩薩求法譚　十万頌般若

『初会』の常啼菩薩求法譚冒頭には他の十万頌般若の常啼菩薩求法譚には存在しない内容が含まれる。この点について『西蔵大蔵経甘殊爾勘同目録』に次の記述がある。

> この常啼菩薩品の始め大正蔵経にて五行の文は大品般若に比較するに，當に前品の終にあるべきもので常啼品に入るべきものではない。(1)

つまり，常啼菩薩求法譚冒頭の内容は誤ってこの箇所に挿入された前品の一部としている。ここに指摘される大品般若（以下『大品』）の前品とは「如化品」のことで，該当する箇所は次の通りである。

> 須菩提白佛言。世尊。云何教新發意菩薩令知性空。佛告須菩提。諸法本有今無耶。(2)
>
> 須菩提佛に白して言さく，世尊，云何が新發意の菩薩を教へて性空なることを知らしめん。佛須菩提に告げたまはく，諸法本有りて今無きや。(3)

この内容について十万頌般若諸本を比較検証する。十万頌般若において『大品』「如化品」にあたるのは，蔵訳では chos nyid mi ’gyur ba bstan pa「法性不変品」。『初会』では「無動法性品」と称される。対象としたのは，デルゲ版，北京版，チョネ版，ストク版，ナルタン版，シェルカル（ロンドン）写本，プダク写本，『初会』。

〈諸本の比較〉

『大品』「如化品」の当該箇所の内容が十万頌般若では増広されて以下のようになっている。

プダク写本

rab 'byor gyis gsol pa / bcom ldan 'das las dang bo pa'i gang zag gis / ngo bo nyid stong pa nyid yongs su 'tshal bar bgyi na / ji ltar gdams shing rjes su bstan par bgyi / bcom ldan 'das kyis bka' stsal ba / rab 'byor ci sngon dngos po yod par gyur pa la / phyis dngos po med par 'gyur ba yod dam / rab 'byor 'di la dngos po yod pa'ang med / dngos po med pa'ang med / ngo bo nyid kyang med / gzhan gyi dngos po'ang med na / de la gang yongs su shes par bya ba'i ngo bo nyid stong pa nyid ces bya ba lta yod par 'gyur re skan //(4)

スブーティは申し上げた。世尊よ，初心の者が自性が空であることを完全に求めるとしたならば，どのように教えて示しましょう。世尊は仰った。スブーティよ，何が前もって存在したもので，（何が）後に存在しなくなるものであろうか。スブーティよ，ここに確かな存在もない。存在しないものもない。自性もない。他性もない。すなわち，完全に知られるべきものである自性を空と見ていたことが変わることは決してない。

『初会』

爾時具壽善現白佛言。世尊。云何教授教誡初業菩薩。令其信解諸法自性畢竟皆空。佛告善現。豈一切法先有後無。然一切法非有非無。無自性無他性。先既非有後亦非無。自性常空無所怖畏。應當如是教授教誡初業菩薩。令其信解諸法自性畢竟皆空。(5)

爾の時具壽善現，佛に白して言さく，世尊，云何が初業の菩薩に教授教誡し其をして諸法の自性畢竟皆空なるを信解せしめんかと。佛，善現に告げたまはく，豈に一切法は先有後無ならんや。然かも一切法は有に非ず無に非ず，自性無く他性無く，先に既に有に非ず後亦た無に非ず，自性常に空にして怖畏する所無し。應當に是の如く初業の菩薩を教授教誡し其れをして諸法の自性畢竟皆空なりと信解せしむべし。(6)

蔵訳諸本を見ると，デルゲ版に再添後辞 da（da drag）や myed といった古い時代の表記がある点，北京版が yongs su 'tshal ba を yongs su 'grol ba とし，stong pa nyid ces bya ba を stong pa nyid yod ces bya ba とする点，チョネ版が ji ltar gdams を ji ltar bdags とする点，これら若干の違いはあるものの，蔵訳諸本の内容はほぼ同じであるため，ここにはプダク写本のみを挙げた。『初会』に下線を施した部分は蔵訳諸本と共通する内容である。

『初会』以外に常啼菩薩求法譚が存在する十万頌般若はナルタン版，シェルカル写本，プダク写本。これら三本の蔵訳にも多少の語句の異同はあるが内容的に差異はないので，プダク写本により常啼菩薩求法譚冒頭部分を示す。

de nas bcom ldan 'das kyis tshe dang ldan pa rab 'byor la bka' stsal pa / rab 'byor gzhan yang rigs kyi bu 'am rigs kyi bu mo shes rab kyi pha rol tu phyin pa tshol bar 'dod pas / ji ltar byang chub sems dpa' sems dpa' chen po rtag tu ngu da ltar / de bzhin gshegs pa dgra bcom pa yang dag par rdzogs pa'i sangs rgyas sgra dbyangs mi zad pa sgrogs pa'i drung na/ tshangs par spyad pa spyod ba des yongs su btsal ba de bzhin du shes rab kyi pha rol tu phyin pa 'di yongs su btsal bar bya'o //(7)

それから，世尊はスブーティー長老に向って仰った。スブーティーよ，さらに，善男子あるいは善女人で，般若波羅蜜を求めんと欲する者は，今，如来にして，応供たりて，真に完全に悟られた仏である，声音を優れて発する如来（大雲雷音仏）のもとで梵行を行じている常啼菩薩摩訶薩が完全に探し求めたように，それと同じようにこの般若波羅蜜を完全に探し求めるべきである。

これらの十万頌般若は常啼菩薩求法譚直前の内容が慈氏品(8)であるから，「説法主が世尊，対告衆が弥勒菩薩」から「説法主が世尊，対告衆がスブーティ」へと変わっているのがわかる。ただし，この慈氏品は漢訳のいずれの般若経にも伝承されていないので，本来般若経に存在しなかった内容であり，後世に付加された内容であると考えられている(9)。従って，慈氏品が十万頌般若に付加される以前は前品末の「説法主が世尊，対告衆がスブーティ」の構図のまま常啼菩薩求法譚が始まっていたことになる。『初会』の当該部分を見ると

復次善現。若菩薩摩訶薩欲求般若波羅蜜多。應如常啼菩薩摩訶薩求。是菩薩摩訶薩今在大雲雷音佛所修行梵行。(10)

復た次に善現，若し菩薩摩訶薩般若波羅蜜多を欲求せば應に常啼菩薩の求むるが如くすべし。是の菩薩摩訶薩は今大雲雷音佛の所に在りて梵行を修行すと。(11)

「説法主が世尊，対告衆がスブーティ」という構図なのが分かる。この直前の内容はどうかというと，先に引用した通り「諸法の自性畢竟皆空なりと信解せしむべし」という世尊からスブーティへの説示である。「説法主が世尊，対告衆がスブーティ」という構図が変わっていない。蔵訳を参照すれば「復た次に善現」で始まる世尊の説示が常啼菩薩求法譚の起点なのは明らかである。ところが『初会』の編纂者は「爾の時具壽善現，佛に白して言さく」を常啼菩薩求法譚の起点とした。本来，世尊からスブーティへの説示として始まっていた常啼菩薩求法譚。その起点が「スブーティから世尊への問い」に移行したのは何故であろうか。その理由を筆者は常啼菩薩求法譚が別行に流布したことに関係すると考えている。渡辺章悟氏は，サンスクリット写本とチベット語訳が 72 章からなり，ともに末尾の二章を欠いていることから，「常啼菩薩品」と「法涌菩薩品」は別行に流布していたものが，後代に付加されたと推定しており(12)，常啼菩薩求法譚が十万頌般若を離れて存在していた時期がある可能性を示している。同じく別行に流布した Saddharmapuṇḍarīkasūtra, samantamukhaparivarto nāmāvalokiteśvaravikurvaṇanirdeśaś caturviṃśatimaḥ（観音経）の冒頭を見ると，

atha khalv Akṣayamatir bodhisattvo mahāsattva utthāyāsanād ekāṃsam uttarāsaṅgaṃ kṛtvā dakṣiṇaṃ jānumaṇḍalaṃ pṛthivyāṃ pratiṣṭhāpya yena bhagavāṃs tenāñjaliṃ praṇāmya bhagavantam etad avocet / kena kāraṇena bhagavann Avalokiteśvaro bodhisattvo mahāsattvo 'valokiteśvara ity ucyate / evam ukte bhagavān Akṣayamatiṃ bodhisattvaṃ mahāsattvam etad avocet /(13)

その時，無尽意菩薩大士は座より起ち上がり，片方の肩の上衣を袒し，右の膝を地面に立

て，仏に向かいて合掌して是の如く申し上げた。世尊よ，何の因縁によって観世音菩薩大士は観世音と呼ばれるのでしょうか。このように申し上げた時，世尊は無尽意菩薩大士にこのように仰った。

対告衆である無尽意菩薩が観世音菩薩のいわれを世尊に尋ね，世尊がそれに答える場面。これから説かれる内容（観世音と呼ばれる理由）を示す導入部の役割を果たしている。『初会』常啼菩薩求法譚冒頭の内容も初業の菩薩に諸法の自性畢竟皆空なるを信解せしめるという意図が示されている。これが常啼菩薩求法譚の導入部として最適であった。また，別行に流布しているにもかかわらず de nas（「復た次に」と訳されることが多い）を常啼菩薩求法譚の起点とするには違和感があった。内容が「世尊の説示」から「スブーティの問い」へと移行する箇所を常啼菩薩求法譚の起点とすることに不自然さを感じなかった。これらが小論で扱う誤りが生じた原因と考えられる。

〈章品の比較〉

次に上記蔵訳十万頌般若諸本の章構成を比較する。紙数の制限があるので，品名を併せ持つ章のみを示すと次表のようになる。なお，『初会』は全ての章が品名を併せ持つので省略した。

梵本同様 72 章を以て終わる十万頌般若と 73 章以降が存在する十万頌般若の二つの系統が存在するのがわかる。また 72 章までを比較すると品名が最も少ないのはナルタン版である。このナルタン版については諸説あるが，旧ナルタン写本カンギュルが原本と考えられている。この旧ナルタン写本カンギュルに収められる十万頌般若の原本について，シトゥ・チューキジュンネー（si tu chos kyi 'byung gnas）の『デルゲ版カンギュル目録』（sde dge bka' 'gyur dkar chag）に次の記述がある。

sher phyogs 'bum la / btsan po khri srong lde'u btsan gyi sku ring la reg zig sngo dmar sogs 'bum tshar drug tsam yod par grags shing / de las mched pa'i khri sde srong btsan gyi dus su bzhengs pa'i bla 'bum chen mo khri lde gtsug gi bla 'bum skya bo / 'jing yon gyi spug 'bum / gtsang ma'i bye 'bum / ral pa can gyi drug 'bum / gnam sde lha'i zhal dmar can / dar ma'i shog ser can sogs dang / 'bangs kyis bzhengs pa'i 'bum tshar bcu dgu sogs dang / de dag rnams las mched pa shin tu mang bar bzhugs pa'i rgyun las bar skabs su ma nyams ma bslad pa'i phyi mo rnams la dbus pa blo gsal dang / lo tsA ba bsod nams 'od zer dang / rgyang ro byang chub 'bum sogs mkhas pa mang pos sgo bstun te dag par gtan la phab pa dang /[14]

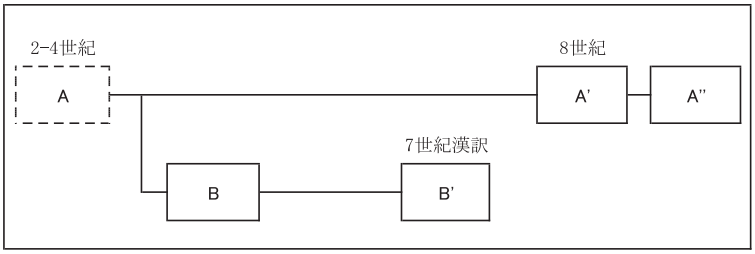
般若十万頌について，ツェンポ・チソンデツェン（btsan po khri srong lde'u btsan, 742-797）の時代において青と赤の備忘録等に般若十万頌は 6 部程があると知られ，それから派生したチデソンツェン（khri lde srong btsan, 776-815）の時に建立されたラブムチェンモ

	デルゲ版	北京版	チョネ版	ストク版	ナルタン版	シェルカル写本	プダク写本
1 章	gleng gzhi	gleng gzhi（縁起品）	gleng gzhi	gleng gzhi	gleng gzhi	gleng gzhi	gleng gzhi
2 章	shA ri'i bu	shA ri'i bu（舎利子品）	shA ri'i bu	sha ri'i bu	sha ri'i bu	sha ri'i bu	sha ri bu
13 章	rab 'byor				rab 'byor		
14 章		rab 'byor（善現品）	rab 'byor	rab 'byor		rab 'byor	rab 'byor
22 章					brgya byin		
23 章	brgya byin				brgya byin		
24 章	yongs su bsngo ba	brgya byin（帝釈品）	brgya byin	brgya byin	yongs su bsngo ba	brgya byin	brgya byin
25 章		yongs su bsngo ba（廻向品）	yongs su bsngo ba	yongs su bsngo ba			yongs su bsngo ba
40 章	phyir myi ldog pa'i rnam pa dang tshul						
41 章		phyir mi ldog pa'i rnam pa dang tshul（不退転相理品）	phyir mi ldog pa'i rnam pa dang rtags dang tshul	phyir mi ldog pa'i rnam pa dang rtags dang tshul		phyir mi ldog pa'i rnam pa dang tshul	phyir mi ldog pa'i rnam pa dang tshul
43 章	gang gA'i lha mo						
44 章		gang gA'i lha mo（殑河天女品）	gang gA'i lha mo	gang ga'i lha mo		gang ga'i lha mo	gang ga'i lha mo
63 章	mtshan dang dpe byad bzang po mngon par bsgrub pa dang pha rold tu phyin dpa bstan pa	mtshan dang dpe byad bzang po mngon par bsgrub pa dang pha rol tu phyin pa bstan pa（相，形好現成波羅蜜多説示品）			mtshan dang dpe byad bzang po mngon par bsgrub pa dang pha rol tu byin pa bstan pa		
64 章	mnyam pa nyid du bstan pa	mnyam pa nyid du bstan pa（説平等品）	mtshan dang dpe byad bzang po mngon par sgrub pa dang pha rol tu phyin pa bstan pa	mtshan dang dpe byad bzang po mngon par bsgrub pa dang pha rol tu phyin pa bstan pa		mtshan dang dpe byad bzang po mngon par bsgrub pa dang pha rol tu phyin pa bstan pa	mtshan dang dpe byad bzang po mngon par bsgrub pa dang pha rol tu phyin pa bstan pa
65 章			mnyam pa nyid du bstan pa	mnyam pa nyid du bstan pa		mnyam pa nyid du bstan pa	mnyam pa nyid du bstan pa
72 章	chos nyid myi 'gyur ba bstan pa	chos nyid mi 'gyur ba bstan pa（法性不変品）	chos nyid mi 'gyur ba bstan pa	chos nyid mi 'gyur bar bstan pa			
73 章					rtag tu ngu	chos nyid mi 'gyur ba bstan pa	chos nyid mi 'gyur bar bstan pa
74 章					chos 'phags	byams pa	byams pa
75 章					yongs su gtad pa	rtag tu ngu	rtag tu ngu
76 章						chos 'phags	chos 'phags
77 章						yongs su gtad pa	yongs su gtad pa

（bla 'bum chen mo），ティデツク（khri lde gstug）のラブムケポ（bla 'bum skya bo），ジンヨン（'jing yon）のプクブム（spug 'bum），ツァンマ（gtsang ma）のチェブム（bye 'bum），ラルパチェン（ral pa can, 806-841）のトゥクブム（drug 'bum），ナムデラ（gnam sde lha）のシャマルチェン（zhal mar can），ダルマ（dar ma）のショクセルチェン（shog ser can）等と民衆が建立した般若十万頌19部等と，それらから派生したものでとても多くある系統から欠落していなくて誤写がない原本等とを，ウパ・ロセル（dbus pa blo gsal）とソナムオセル（bsod nams 'od zer）訳師とギャンロ・チャンチュプブム（rgyang ro byang chub 'bum）等の多くの学者が校訂して正しく決定したものである。(15)

これによれば，旧ナルタン写本カンギュルの十万頌般若の原本は8世紀のものであることが判るので，漢訳（『初会』）の方が古いことになる。また，8世紀の時点で数多くの十万頌般若が存在し，その中には内容が欠落したり，正しく書かれていない十万頌般若も存在したことがわかる。下線を施した原本に基づいて旧ナルタン写本カンギュルの十万頌般若が決定され，旧ナルタン写本カンギュルに基づいて開版されたナルタン版の十万頌般若に慈氏品が存在するところから，下線を施した原本にも慈氏品の内容が存在したと考えられる。

次に蔵訳十万頌般若諸本の先後関係を考える。ナルタン版の十万頌般若において慈氏品は未だ一つの章として確立しておらず第73章（rtag tu ngu「常啼菩薩品」）の前半部に挿入された状態にある。この状態の十万頌般若をA'とし，般若経が十万頌へ増広され，常啼菩薩求法譚や嘱累品が存在したと想定される状態の十万頌般若をAとする。シェルカル写本，プダク写本の十万頌般若では，慈氏品が第74章として確立する。この状態の十万頌般若をA"とする。般若経が十万頌へ増広された段階のAから何らかの事情で73章以降が欠落する。この状態の十万頌般若をBとする。この欠落した部分に常啼菩薩求法譚と嘱累品が存在したと考えられ，常啼菩薩求法譚が別行に流布したと考えられる。その後，常啼菩薩求法譚と嘱累品が十万頌般若に再付加される。この形態の梵本が原本となって漢訳されたのが『初会』。これをB'とする。以上に基づき十万頌般若の系統図を推定すると次のようになる。



	十万頌般若	章数	嘱累品	特徴
A				二万五千頌から十万頌に増広された直後の十万頌般若を想定。慈氏品の内容は存在せず，常啼菩薩求法譚と嘱累品が存在したと考える。
A’	ナルタン版	75	あり	常啼菩薩求法譚が存在する。常啼菩薩品は慈氏品の内容と共に一つの章を構成する。B 系統の諸本と比較するに，phyir mi ldog pa’i rnam pa dang tshul「不退転相理品」，gang gA’i lha mo「殑河天女品」，mnyam pa nyid du bstan pa「説平等品」，chos nyid mi ’gyur ba bstan pa「法性不変品」といった品名を欠く。
A”	シェルカル写本 プダク写本	77	あり	常啼菩薩求法譚が存在する。常啼菩薩品の前に慈氏品が一つの章として確立する。
B	デルゲ版 北京版 チョネ版 ストク版	72	なし	73 章以降が欠落した状態で残ったもの。現存する梵本も同じ。慈氏品も常啼菩薩求法譚も存在しない。
B’	『初会』	79	あり	常啼菩薩求法譚と嘱累品が再付加された十万頌般若が原本となり漢訳されたのが『初会』と考えられる。慈氏品は存在しない。

まとめ

A’, A”, B における chos nyid mi ’gyur ba bstan pa「法性不変品」（A’は品名を欠く）の終わり方は共通しており，B’（『初会』）のみ異なる。A’，A”の十万頌般若は 8 世紀以降のものであるが，A’（ナルタン版）の 72 章までと B の 72 章までの章品を比較すると，A’の方が品名が少なく古い形態を留めている。A’（ナルタン版）に慈氏品の内容が挿入される以前，A の状態は維持されていた可能性がある。A から常啼菩薩求法譚と嘱累品が欠落したのが B（デルゲ版，北京版，チョネ版，ストク版）であり，この状態が受け継がれていく過程で次々と品名が付与されていく。一方欠落した常啼菩薩求法譚は別行に流布する。この時期，前品末の内容を冒頭に加え別行流布に適した形態をとった。その後，欠落していた常啼菩薩求法譚と嘱累品が十万頌般若に再付加されることになる（B’）。この時に小論で問題とする誤りが生じたと考えられる。『西蔵大蔵経甘殊爾勘同目録』で誤りと指摘された『初会』常啼菩薩求法譚冒頭の内容は，常啼菩薩求法譚が別行に流布していた時代の痕跡と考えられる。

注

(1) 『西蔵大蔵経甘殊爾勘同目録』，大谷大学，1930-1932 年，196 頁。

(2) 『摩訶般若波羅蜜経』巻 26「如化品第 87」（大正蔵 8），416 a.

(3) 『昭和新纂国訳大蔵経』経典部第 4 巻，東方書院，1928 年，197 頁。「本有今無」は経量部の説である「本無今有」を連想させるが，大智度論には次のように釈されている。

論釈曰。上品中説。新發意菩薩云何教性空法。性空法畢竟無所有空難解難得故。佛答。法先有今無耶。佛意性空法非難得難知。何以故。本來常無更無新異。汝何以心驚謂爲難得。是性空法雖甚深菩薩但能一心勤精進不惜身命。作如是一心求便可得。『大智度論』巻 96「釋薩陀波崙品第 88」（大正蔵 25），731 bc.

論釋して曰く，上の品の中に説かく，新發意の菩薩には，云何に性空の法を教ふるや。性空の法は畢竟無所有空にして解し難く，得難きが故にと。佛答へたまはく，法は先に有にして今は無なるやと。佛の意は性空の法は，得難く知難きにあらず。何となれば，本來常に無にして更らに新に異ることなければなり。汝何を以てか，心に驚いて，謂て得難しとなすや。是の性空の法は甚深なりと雖も，菩薩は但だ能く一心に勤めて精進して身命を惜まず。是の如く，一心に求むることをなさば便ち得べしと。『国訳一切経印度撰述部』「釋経論部五ノ下」，大東出版，1977 年，217 頁。

(4) shes rab kyi pha rol tu phyin pa stong phrag brgya pa, phug brag No.7, ma 371 a 2-6, sde dge No.8, a 395 a 3-6, peking No.730, ji 320 a 3-6, cone No.108, ma 299 a 2-5, stog No.9, ma 365 a 2-4, snar thang No.9, na 484 a 1-4, sher dkar（London）No.9, ma 290 b 1-4.

(5) 『初会』巻 398「初分常啼菩薩品第七十七之一」（大正蔵 6），1059 a.

(6) 『国訳一切経印度撰述部』「般若部四」，大東出版，1971 年，333 頁。

(7) 前掲書，phug brag No.7, ma 387 a 3-5, snar thang No.9, na 501 a 1-4. sher dkar（London）No.9, ma 303 a 6-b 1.

(8) この慈氏品は袴谷憲昭氏による和訳が知られている。袴谷憲昭「弥勒請問章和訳」（駒澤大学仏教学部論集 6, 1975）pp.210-190.

(9) 慈氏品は弥勒請問章，弥勒所問品，分別菩薩学品とも称される。漢訳には存在しないものの，蔵訳十万頌般若，蔵訳二万五千頌般若（2 種），蔵訳一万八千頌般若，梵本二万五千頌般若に存在する。最初に般若経への付加がなされた時期について長尾雅人氏は「弥勒所問品」を『般若経』に付加した人が『中辺論』の影響下にあり，それによって「弥勒所問品」が成立した可能性を示した上で，「弥勒所問品」の付加は，無性（490-550）よりも以前，世親（400-480 または 320-380）よりも以後に行われたというべきではなかろうかとしている。長尾雅人『摂大乗論　和訳と注解』上，講談社，1982 年，39-40 頁。

(10) 『初会』巻 398「初分常啼菩薩品第七十七之一」（大正蔵 6），1059 a.

(11) 『国訳一切経印度撰述部』「般若部四」，大東出版，1971 年，333 頁。

(12) 勝崎裕彦ほか『大乗経典解説事典』，北辰堂，1997 年，71 頁。

(13) U. Wogihara and C. Tsuchida, Saddharmapuṇḍarīka-sūtram : romanized and revised text of the Bibliotheca Buddhica publication（Sankibo, 1994）p.362.

(14) bde bar gshegs pa'i bka' gangs can gyi brdas drang pa'i phyi mo'i tshogs ji snyed pa par du bsgrub pa'i tshul las nye bar brtsams pa'i gtam bzang po blo ldan mos pa'i kuNDa yongs su kha phye ba'i zla 'od gzhon nu'i 'khri shing. Collected works of the great Ta'i si tu pa kun mkhyen Chos kyi "byung gnas bstan pa'i nyin byed, volume, 9, published by sherab gyaltsen for Palpung sungrab nyamso Kangra HP. India, 1990, ta 204 a 6-ta 204 b 3.

(15) 固有名詞，人名の読みや生没年はツルティム・ケサン氏の訳を参照した。原文とツルティム・ケサン氏の表記に異同がある場合は原文の表記を用いた。ツルティム・ケサン，伴真一朗『チベットにおける大蔵経（カンギュル・テンギュル）開版の歴史概観』（真宗総合研究所研究紀要 27），2010 年，52 頁。

（さえき　じかい　佛教大学総合研究所特別研究員）